

氏名	中村 七海
学位の種類	博士(美術)
学位記番号	第91号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論文題目	手応えのありか 絵を描く行為と触覚のゆくえ
審査委員	主査 教授 綾田 勝義 教授 横田 学 教授 西田 真人 准教授 竹浪 遠 特任教授 大野 俊明

## 論文の要旨

絵を描く手応えとはどこからくるのか。これだという感覚は何に触れているのだろうか。視覚表現という目的よりも、描く行為自体に筆者を引き留める何かがある。本研究は作家の身体をもって日本画制作における触覚の可能性を省察する。

日常生活に目を向けると、昔は手作業で行っていた多くの事を今は機械が手助けしてくれる。掃除や洗濯など、作業が効率的にはかどり作業時間の短縮に繋がった。それは絵画制作においても例外ではなく、写真を下図にして写せば、絵が苦手な人でも情景を描くことができる。またコンピューターのソフトウェアの中には、有名な画家の表現技法をボタン一つで真似ることができるものもある。これらは合理的・効果的な進歩であり、表現の可能性を広げたことは歓迎すべき事実である。

しかし筆者は自身の制作ではどうしても、直接手で触れるこのとない活動に漠然とした不安を覚える。絵を描く手のぎこちない動きや、手探りの隙間に、何か大切なものが挟まっているように思えてならない。視覚以前にあるこの感覚は何であろうか。

第1章では、触覚が個体差のある感覚だということを念頭に置き、本研究に関わる触覚の機能について定義した。そして触覚の発達を学習と記憶について考察し、成長とともに身体内で触覚と視覚が密接に結びついていくことを示した。

第2章では、触覚と視覚の相互作用について鑑賞と表現という観点から検討し、表現の感受に果たしている役割に言及した。鑑賞では彫刻家佐藤忠良の作品に直接触れる体験を通じて、表現では

画家須田國太郎の 6000 枚にも及ぶ写生について検討した。表現は作家にとって触覚の位置と重なることを指摘し、茶碗の表現を介して筆者の考えが他の表現や方法にも繋がることを示した。

第 3 章では、絵画に現れる触覚について、線という観点から分析した。線は線として突然出現するのではなく生成の際には必ず触覚を伴う。筆触について深く考察した美学者金原省吾の研究を参考に、日本画の線から中国絵画の皴法まで線の範囲を広げつつ、画家の触覚と表現の関係を具体的に示した。作品や画家の制作記述を考察し、絵を描く手応えとは自身の内側と外側の統合が身体で予測されたときに得られる感覚であると結論づけた。

第 4 章では、ここまでの考察をもとに自身の表現を省察した。筆者はこれまで自分を独立した存在と考え、そこから周囲を観察するという立場を維持していた。しかし内も外も感知するという触覚の機能によって、当事者としてその一部であるという事実を体験する。自身の感覚（内）と表現（外）の媒介（触覚）を認識できるようになり、自身の作品を省察することに結びついた。

第 5 章では、触覚という視座から自身の課題「余白」「空間」「場」を総括しつつ、筆者の絵は展示の場と一体となることで、鑑賞者の触覚へ繋がっていくという新たな可能性を提示した。

以上のように、本論文は外部に触れると同時に内部に感じ取るという触覚の相互作用によって、表現が身体の手を越えることを明らかにした。また筆者の触覚における今後の可能性を「場」という観念で提示するものである。

## 審査結果の要旨

日本画領域 中村七海氏の博士（後期）課程本審査提出論文『触覚の在処 -絵を描く手応えへの省察-』は、「絵を描く手応えとは何に触れているのだろうか。これだという感覚はどこからくるのか。視覚表現という目的よりも、描く行為自体に引き留める何かがある」と言う筆者自身の作品を描く実感の記述から始まっている。

論文の構成は次のとおりである。序文 はじめに 〈第1章 触覚〉 現在認識されている触覚の機能についての確認 〈第2章 芸術〉 鑑賞と表現に関わる触覚の作用について考察 〈第3章 線〉 触覚と画家の身体の関係性を線の表現から考察 〈第4章 触知〉 触覚を通じて筆者の表現の必然性の省察 〈第5章 変化〉 触覚を意識したことによる作品の変化の確認 結語 おおわりに

提出論文は、論理的に道筋を立てて説いた文章には今一步至らない部分がまだ少し残っていたり、第3章に資料として示した作品の読み解きが甘かったり、文献の引用部分や自己の追想の記述と客観的な考察の書き分け、引用文献の抜け落ちなど、本審査のプレゼンテーションで自ら補足したものもあり、部分的な手直しが求められる箇所も指摘された。しかしながら、一貫して常に自己の絵を描く手応え「触感」を出発点にして、様々な側面から考察を行うことによって、自己の考えを言語で外在化し、これらの考察が作品制作の進展と連動して変化してきている。このように、論文と作品制作が一体となり、制作時の実感的な「触覚」が論文に、論文作成のための思考が制作に、双方向に良い方向に働いたことは評価に値するものと考えます。

以上のように評価できる点と課題が混在しているが、総合的に判断し本論文は博士（後期）課程本審査提出論文としての要件を満たしていると評価した。

作品展示では6点の作品が展示された。「舞楽図」は240×700 cmの大作である。「白雨はくう」193×400 cm、「時雨しぐれ」193 cm×700 cm、「生」162×162 cm、「梅香る」192×320 cm、「在る」97 cm×194 cm

論文のなかで、考察を進めてきた「存在を触知する線」を、実際の作品制作のプロセスの中で、いかに実現していくかを実験試行された作品である。

論文5章から考察されている余白への課題と、その解決へ向けた取り組みとして今回新たに制作展示された作品は「白雨」、「時雨」、「梅香る」、「生」、「在る」である。余白を対象からの余韻により触れる手がかりを得て、余白を「空間」でなく、触覚の「場」が広がっていくととらえた。余白への余韻のエネルギーの放出として、それを線のエネルギーに置き換えて余白を描く実感を得る作品制作を展開している。2016年制作「生」で手がかりを得てから、以降「梅香る」、「白雨」、「時雨」、「在る」と制作している。論文中にも余韻は消滅せずに、触覚の実感と共に絵の中に堆積し、濃密な密度が構造化されていくことが述べられているが、作品制作の経過にその堆積を確認することができた。

「白雨」、「時雨」では対象と余白に広がる余韻が一体となり線の共振が波紋の様な広がりを見せて、筆者が次への展開として展示環境の考察していることとして、線のエネルギーの堆積が作品を超え

て派生し作品展示環境を触覚の場とするあり方を感じさせられるものとなって来ている。

日本画の具体的に何も描かない象徴性のある空間表現に触知という感受による空間実感を見出し、その触知の由来を、描く対象から派生する余韻を線のエネルギーの集積でとらえる具体的な表現技法を編み出したのは、新しい試みであると評価できる。

論文による考察が、作品制作において、実験し実証していることが見ることができ、その成果が本審査合格に達しているものとして大学院博士課程日本画領域 中村七海氏の博士論文、ならびに作品展示を審査員全員一致で合格と判定した。